

構造と生理 胃は口側より噴門部・穹窿（胃底）部・胃体部・胃角部・前庭部・幽門部に分けられる。胃粘膜には2種類の粘液細胞があり、胃粘膜表面を覆う表層粘液細胞からは**被覆上皮型粘液**、噴門腺や胃底腺の一部を構成する副細胞および幽門腺からは**腺上皮型粘液**が分泌される。噴門のまわりには噴門腺があり、主として粘液を分泌する。穹窿部と胃体部には胃液の大部分を分泌する胃底腺が存在し、その腺体下部と腺底部に多く分布する**主細胞**からペプシノゲンが、腺頸下部から腺体部に分布する**壁細胞**からは、迷走神経刺激、ガストリン、ヒスタミンにより塩酸が分泌される。幽門部には幽門腺が存在し、大部分は副細胞に類似した粘液細胞からなり、壁細胞はほとんどなく、主細胞はまったく存在しない。また、主な内分泌細胞として、**G細胞**は主として幽門腺に分布し（胃底腺に小数、十二指腸・小腸にも認められる）、**ガストリン**を分泌する。**D細胞**は**ソマトスタチン**分泌細胞で全消化管に分布するが、胃の幽門腺ではG細胞に、胃底腺では壁細胞に近接して存在する。ソマトスタチンはガストリン、コレシストキニン、インスリン、グルカゴンなどの抑制物質として重要である。また、**内因子**は壁細胞で合成されて分泌され、ビタミンB₁₂の回腸での吸収のコファクターとして必須である。

胃液中には以上のほかに、電解質としてH⁺、Cl⁻、Na⁺、K⁺、HCO₃⁻、Ca²⁺、Mg²⁺などが存在し、胃液分泌刺激時には胃液中の塩酸は150 mEq/l、K⁺は10~20 mEq/lとなり、嘔吐が持続するとK⁺、Cl⁻などの大量喪失となる。